

唐石彫不動明王像

矢代幸雄

一

普通に、支那には不動像は無い、といふ。日本にあれほど流行した不動の信仰は、その多くが密教の日本の發展に歸せられやうとも、もとをたゞせば、空海圓珍等謂ゆる入唐八家以降が支那より移植したものに於て、その本國の支那に不動像を殆ど全く見ないことは、不思議といふほかはない。唯だ支那彫刻の遺物として僅かに不動の描出を見出し得るものは、後に説くところの、五大明王を鑄出した唐製五鈷鈴のみであつて、然も、斯くの如き五鈷鈴すら、今日までのところでは、支那に保存された例は知られず、悉く日本或は稀に朝鮮に於て發見されたものであつた。然るに、余は或る年米國シカゴ市フィールド博物館に人類學的大蒐集を見に行つた時、その支那彫刻のうちに、思ひかけず石彫不動像一軀に出會して、稀有なる珍品に愕いた。當時フィールド博物館の人類學部長としては、有名な支那學者ベルトルド・ラウファー氏(Dr. Berthold Laufer)が居

唐石彫不動明王像

た。ラウファー氏は言語學者乃至歴史家にして、同博物館の支那關係の蒐集は、多く人類學或は風俗史の立場より選擇せられ、その難多なる種類は總て美術的に優れたものばかりではなかつたが、それだけにまた珍奇なる遺物を含みて、研究資料的價値は輕視出來ぬものがあつた。石彫不動像の如きもその種の顯著なる一例であつて、余はこの旨をラウファー氏に話したところ、そうであるかと言つて大いに喜ばれ、此像が西安府北方三哩の一寒村 Yangchia に發掘されたのを買い取つた旨を語られた。但しこの像の製作年代に關しては、余は同氏と意見を異にし、輕い論争などをして、結局余は之に關して將來一文を草することを約束して別れた。爾來數年、余は渡米の度毎にラウファー氏を訪ねたが、元氣と思はれた氏は、一昨年突然長逝された。それによつて、單に米國の東洋學界は頓に寂寥を加へたのみならず、日本は氏に於て親しき友達を失ふた。そこで余は昨年の早春歐洲より歸朝の途次、特にシカゴに立ち寄り、亡友を弔ふつもりで再び不動像を調査し、寫真を作製して歸つた。茲に一

つの論考を綴るは、故ラウファー氏に對する曾ての約束を果す所以である。

但し、不動の問題は甚だ廣汎にして、密教の殆ど全分野に亙り、容易に手を下すことは出来ない。特にシカゴ不動像の如く、現在知られて居るところでは恐らく支那唯一の、そして最古の、同尊像造顯に關して考へる時、當然支那密教成生時代の問題に觸れざるを得ず、是等の佛教史上の複雑にして困難なる問題は、勿論その方面の専門家にあらざる余の能く解き得るところではない。余は識者の高教を乞ひつゝ、唯だこの珍らしき實例を提示し、これに聊か美術史的論考を加へて、一つの材料的寄與を斯界になさんとするばかりである。^(註二)

註一 密教圖像の研究に詳しい文學博士小野玄妙氏は、その著「佛教の美術及歴史」(第七一〇頁)に於て「此の尊像(不動)は今日まで私の狭い見聞の及ぶところでは、印度からも西域からも、その一つの遺像すら發見し得ない」と告白されて居る。極東に發展する佛教美術の貯水池の如き西域に於ては、吾人は未だ實物に就て精査の機會を持たないのであるが、出版物に見得る限りに於ては、ペリオ氏の燉煌圖冊(Pelliot, Touen Houang)第二冊第一二八圖、第三冊第一三一圖に寫出するところのそれぞれ千鉢文殊及び千手觀音の曼荼羅壁畫に、中尊の前に火焰に包まれたる四明王が描出されて居るうち、三體は多臂であるに對して、一體は二臂にして且つ右手劔左手絹索を執る有様は、多少不動明王に類するものがある。而してこの像は蓮華座の上に趺坐して居る。但しこの像の圖像的決定は困難である。(參照、松本榮一氏・燉煌畫の研究・第六四六—九頁・千臂文殊菩薩圖。)

或時文學博士鳥居龍藏氏の御宅に於て、當時同氏が編纂して居られた遠代の文化に關するらしき未完の大著の挿繪中に、不動明王の浮彫彫刻のあるのを見せられたことがあつた。是は建築附屬の浮彫として五大明王を刻出したうちの一尊の如く記憶するが、目下鳥居博士は遠く南米に旅行されて居るので、慥かめることが出来ない。

い。是も亦た珍らしいものに相違ないが、時代は茲に問題とするシカゴ像よりは遙かに晩れたもの故、吾人の所論には關係が薄い。

註二 武田豊四郎氏の論文「不動明王論」(密教・二卷・四號より同五卷・二號に亙り十三回に分れて登載せられた、尙ほ未完に畢る)は不動に關する經典の引例に於て最も詳密である。また故大村西崖氏の大著「密教發達史」も參考資料を豊富に含むで居る。余は本稿を草するに當つて、兩者に負ふところが多い。

二

シカゴ像は、既説の如く、西安府北郊三哩の村落より發掘されたものを、明治四十三年(西紀一九一〇年)ラウファー氏によつて購入されたといふ。石質極めて堅牢緻密なる黒大理石にして、その鑿も立たないやうな硬さと、雄渾なる暗黒色の輝きとは、誠に不動明王の形象を刻むに適して居る。法量は、總高一尺五寸二分弱(四六糎)、圓形臺座底部の直徑一尺一寸二分強(三四糎)である。全體が圓錐形を成し、底部は圓形の蓮華座に作り、その上の圓錐形を前後に二分して前半面には浮彫式に不動坐像を刻み、後半面は、尊像背後に光背様の形をなすのであるが、その光背様の部分は、普通の佛體の光背よりは底部極めて厚くして上端に向つて尖り、前後面何れより見るもまた側面より見るも、略ぼ三角形を成すは、甚だ珍奇である。この形式に或る特殊の意味の豫想されること、後來説く通りである。全體の彫法極めて鄭重且つ古樸なるは、一つには、硬い石質に鑿が容易に入り難かつた爲めであらう。ラウファー氏はこの製作を北魏(西紀三八六—五三四)の特に第五世紀といふ早い時代、

年號で言へば、太和景明或はそれよりも古く見ようとしたので、現在もフィールド博物館の解説には、そう記述されて居る。余は勿論それほど古く見ることを得ず、之を初唐頃の製作と鑑する。西紀で言へば第七世紀である。斯くの如き時代の判定は、先づ以て彫刻様式よりも結論さるゝところであるが、是はまた支那佛教史に於ける不動信仰の成立、その儀軌及び圖像の發達、乃至は日本に保存さるゝところの不動古像への接續、等の佛教史的見地よりも研究されなければならず、而して吾人の此方面よりの推定並びに結論は、亦た前記様式論的結論と、矛盾しないやうに考へられるのである。

三

支那に於て不動の造像が何時より行はれ得たか。之を教理的に決定するは、支那密教の源流を探るに等しく、極めて困難なる問題であるが、普通に考へ得る範圍に於ては、先づ姚秦鳩摩羅什の仁王般若波羅密經譯出にまで遡り得る可能性がある。同經受持品第七には

若未來世有諸國王護持三寶者、我使五大力菩薩往護其國、一金剛吼菩薩、手持千寶相輪往護彼國、二龍王吼菩薩云々三無畏十力吼菩薩云々四雷電吼菩薩云々五無量力吼菩薩云々、於汝國中大作利益、當立像形而供養之

とある。この羅什舊譯の五大力菩薩中の金剛吼菩薩は、不空新譯の同經に於ては、五方菩薩中の中方金剛波羅密多菩薩と譯され、而して、更に不空譯仁王護國般若波羅密多經陀羅尼念誦儀軌に於ては、この五方菩薩は敎令輪によりて威怒身を現はして五大明王となり、

中方金剛波羅密多菩薩は威怒不動金剛に當てられて居る。然らば即ち、羅什舊譯の金剛吼菩薩は後に不動に當てらるゝところの前身になる譯であるが是は既に密教時代に入つてなされた解釋乃至附會に過ぎずして、羅什の六朝時代に既に不動のあつた證據にはならないであらう。加ふるに、金剛吼菩薩は持物として千寶相輪を持つことが經文に明記せられ、我國に遺存する五大力吼中の同菩薩の畫像も、高野に在る有名なる大幅を初めとして、皆寶輪を持つ。後に我國に仁王經法が盛に修せられ同曼荼羅が描かれた時は、不空の譯經に従つて中尊を不動として描かれて居るが、この場合の不動も左手に寶輪を捧げて、^(註一)この持物の缺く可らざる所以を明示して居る。即ち羅什舊譯の金剛吼菩薩を不動に當て嵌めたことは、恐らく不空の附會說に過ぎないであらうが、假りに一步を譲つて、金剛吼菩薩を以て不動の前身と見る可き何等かの理由があつたにせよ、それは必須の持物として寶輪を持つた筈である。是は吾人の提出せんとするシカゴ不動像と一致しないものと思はれる。シカゴ不動像は右手に劔を持ち、左手は不幸にも肘の關節より缺損して、本來何を捧げて居たか、分明しない。然し後に詳論する如く、この不動像は、空海圓珍等によりて唐朝に學ばれ日本に最初に造顯せられた不動古像と合致する點多く、それ等より類推すれば、失はれたる左手は絹索を持つたと考へて、殆ど間違がない。勿論、絹索も輪寶も同じく左手に肘の關節を屈げて捧げ持たれたのであるから、像のその部分の形式のみで言へば、輪寶を持なかつた限りではなく、是も一つの有り得る

場合に相違ないのであるが、形像のその他の特色が大體唐朝型不動像に一致或は極めて近似するより見て——是は畢竟見込みの問題になるのであるが——余は不動の普通の形式に従つて、絹索を持つたと想像するを穩當と考へるのである。偕て、今假りに、この復元の想像を以て論旨を進むるならば、シカゴ像は、縱令羅什舊譯による金剛吼菩薩が不動の前身であり得たと假定しても、それを造顯したものとはなり得ず、従つて、しばらく彫刻様式の問題を離れ圖像のみより推すも、この像を、フィールド博物館のなす如く、六朝の製作に歸することは不可能になる。

註一 熊谷宣夫・仁王經曼荼羅考（美術研究・二〇號）

四

羅什舊譯に出て來る金剛吼菩薩が、よし不動の前身であり得たとしても、その不動との合致が教理的に示されたのは、中唐の不空の新譯を待たねばならず、而してまた、この不空の附會説にも拘らず、五大力吼菩薩は支那佛教中に後まで定まりたる輪廓を以て存在するのであるから、不動の初出の問題に就いて、金剛吼菩薩を引合ひに出すことは、あまり重要な意味を持たない。密教神格中に不動の確かに顯はれる最初は、初唐の菩提流志譯不空羼索神變眞言經卷第九と言はるゝ。^(註二)そこには廣大解脫曼拏羅に於ける諸尊の配列が説かれて居るのであるが、釋迦を中心とする内院を取圍む北面の外院第一院に、不動使者が見出される。

北面從西第一、不動使者、左手執絹索、右手持劍、半加趺坐

四

この敘述は誠に簡單ではあるが、後來の不動像の出發をなすに、要點を盡して居る。不動は佛體として二個の資格を具へる。一つは如來使者として、他は調伏の忿怒尊として、の資格であり、而してその始め、如來使者として比較的簡單なる形相を持つたものが、密教の發達するにつれ、神祕と象徵味の多き忿怒尊の方向に、姿體表情持物等を複雑にして、次第に進むのであつた。この菩提流志譯經の不動使者としての簡單なる敘述は、後來の不動像の基本をなす。斯る經文が既に初唐に翻譯されて存立した以上、シカゴ像の如き不動、左手絹索を執り、右手劍を持ち、半跏趺坐するところの不動は、初唐を上限として造顯され得たことは明瞭である。而して余はこれとは全く別個に、彫刻の様式的判定よりシカゴ像を初唐に配し度く思ふて居るのであるから、是とは同時の菩提流志譯經に典據を見出すことは、雙方相照應して甚だ好都合である。

然しながら、同時に考へられることは、このシカゴ像は、現存不動像中、後に引用する胎藏圖像中の同尊像と共に最も簡單なる造像にして、不動使者の原型を多少留むるものではあるが、尙ほ此像を仔細に檢すれば、細部の刻出に於て、盛唐以降の密教興隆時代に盛に出て來るところの不動に關する諸經典及び儀軌、並びにそれ等に従ひて造顯せられ今日日本に残るところの諸不動古像、と共通する部分が多量に見出される。依つて、シカゴ像は是等と比較研究する必要がある、而してその比較研究の後に、同像を初唐の製作に歸

せんとする余の様式的時代判定は、再び考察されなければならぬ。

註一 大村西崖・密教發達史・卷二・頁三二一。

不空罽索神變真言經は、佛書解説大辭典に於ける神林隆淨氏の解説によれば、「耶令闍多譯の十一面觀世音神咒經に基いて、之に金剛頂經、大日經、金剛頂瑜伽中略出念誦經、大品般若經を以て増廣したものである。」そうすると、吾人の問題より言へば、不空罽索神變真言經の支那に譯されたのは、より早かつたけれども、大日經は既に西方に於て作られて居り、それに關する知識は支那に滲透して來得た譯になる。然らば即ち、或經が支那に譯出されたから、その經を典據とする佛像の製作が初めて出來た、それ以前には全く出來得なかつた、といふが如き、極めて嚴密なる關係が譯經と造像との間に存在す、と普通に考へられて居ることは、可成りの餘裕をつけて考へなければならぬことになる。この關係に就いては、後來本文に於て論及するところあるであらう。

五

盛唐より中唐にかけては、善無畏、金剛智、不空等の活躍時代にして、密教經典は盛に漢譯せられて支那密教は確立し、金胎兩部曼荼羅の成立は佛の世界に整然たる體系を與へた。諸尊に關する儀軌の如き造顯の象徴的意義は、密教の神祕主義的論理を以て益々複雑に發展する傾向を持ち、密教諸尊は次第に、その圖様を多様に、その象徴を入り組ませて行つた。特に不動は、その正統教義によれば、密教的宇宙の中心たる大日如來の使者にして、且つまたその變化身として、佛道守護の忿怒部五大明王中の首位を占めたる大立者であつたから、不動に關する論述は廣く密教經典に散在し、その教理も儀軌も繁縟多岐にして、容易に整理して考へ難い。尙ほその他に、

密教には阿闍梨の口傳が重要であつて、經文になき象徴の組合せも行はれたので、問題は一層混雜せざるを得ない。

而して、この支那の不動の問題を更に複雑ならしむる事情は、支那に不動の古像の遺品としては、茲に提出するシカゴ像を除きては、殆ど全く發見せられず、經典の上であれ程盛に述べられて居る唐朝不動像の實際造顯の有様を知るには、全部日本に於ける材料によりて、間接に推測するより途がないからである。日本に於ける不動像は、最も古きものは、入唐八家によつて請來されたる唐朝の製作か、或はその直摹の日本製作にして、是等は唐朝不動像を復原するに貴重な材料に相違ないのであるが、また一方、日本に於ける不動信仰の隆盛は、その造像に早くより日本の選擇と解釋とを混入せしめたること、智證大師の靈感譚に徴するも想像するに難からず、夫故に、日本の材料を以て支那の不動像を推測することは、この間接性に就て、豫め注意を要する次第である。

總て是等の困難なる事情を考慮に入れつゝ、偕て、茲に問題とするシカゴ像を理解し且つこれが時代判定をなすに必要な比較材料を、唐朝の譯經、日本に發見せらるゝ不動に關する古き圖像、畫像、彫刻、及び工藝的遺品等に求むるならば、先づ最も顯著に感ぜらるる點は、是等の日本に發見せらるゝ不動最古像と思はるゝものが、高野の赤不動の如き、また三井寺の黃不動の原型の如き、特殊なる個人的靈感による異例を除いて、大體に於て、シカゴ石彫像に酷似して居ること、是である。在日本の最古の不動像は、之を三種に區

別することが出来る。第一に、五大明王鑄出の唐製五鈇鈴上の不動、第二に、高雄子島東寺等に傳はる唐製曼荼羅の摸寫圖様に顯はる、不動、第三に、入唐高僧の直接の製作に歸せらる、不動彫像中最も

僧等によつて支那より我國に齎らされたものと覺しく、請來目錄にもその種の記載があり、そして是等は多く我國の密敎古寺院に發見せられ、また出で、民間に散つたものもある。是等の鈴體の周圍に

不動明王像

五大明王四天王等の尊像を鑄出したる金剛鈴は、支那本土に多く失はれたる唐朝金屬彫刻の珍らしき遺品にして、その工藝的性質と小さき形狀にも拘らず、支那彫刻史には貴重なる材料を提供する。今

この種の遺品中五大明王を鑄出したる作例を見るに、古來有名なものとしては、法隆寺獻納御物及び高野正智院所藏の鈴等が數へらるゝが、茲にはその種の更に立派なる遺品として、帝室博物館所藏の五鈇鈴を掲げたい。この鈴は近年京城に發見されものだそうで、その朝鮮に入つた徑路は知られて居らず、或は日本經由かも知れないのであるが、何れにせよ、此種の支那の密敎法具が朝鮮に輸入されて居たことは、佛敎流傳史上に面白き示

市ゴカシ 藏館協博ドルーイフ

古様ありと思はる、傳空海作東寺講堂、及び南面不動堂の不動等である。^(註二)

五大明王鑄出その他の形式の金剛鈴は、密敎法具として、入唐高^(註三)

峻を與へる。而してこの帝室博物館五鈇鈴に就きて何よりも興味を惹く點は、その例外的に雄大なる作風である。全體が他の五鈇鈴よりも大形であるばかりでなく、五大明王の鑄出は高浮彫の如く立體

的に突出して、殆ど之に依つて唐朝彫刻の重厚にして漲溢感の旺盛なりし面影を窺ふに足る。製作年代は、すべて他の五鈷鈴と共に、謂ゆる中唐より晩唐にかけての頃、西紀にして第八世紀末より第九

あり、結跏か半跏か不明瞭なものもある）、右手に劔、左手に絹索を執り、頭上には頂蓮一個載せられ、垂髪左側に垂れ、兩眼を見開き、顔は少しく右手の劔の方に向けて居る。佛體は腰衣のほか上體は裸

にて、條帛が左肩より右に向つて懸けられ、

五 また瓔珞も頸より下垂して居る。頭光らし

きものはあるが身光は無く、そして全體を

火焰が取圍むで居る。

鈴 斯くの如き不動の形相は、大體に於て、

第二種の在日本不動古像、即ち日本に最も古く傳はりその密教發達の基礎をなしたるところの重要な曼荼羅、高雄子島のそれ、竝びに現在は近代の摸寫によつて傳はるが東寺の謂ゆる現圖曼荼羅、是等の曼荼羅上の不動と酷似して居る。是等の曼荼羅は、何れも唐請來畫の忠實なる臨摸には相違なく、その圖様はいづれも唐朝に歸せられ、従つて、其所に顯はされたる佛尊の形相は唐朝に行はれたるところを正確に傳へた、と信ずることが出来る。この三本の曼荼羅は大體同一の系統に屬しながらまたその間に異同あり、密教學的には諸種の問題を提起するのであるが、吾人の論題たる不動に關する限りに於ては、その位置並びに形相互に一致して居る。それは胎藏

世紀前半にかけての頃であらう。^(註四)——この五鈷鈴上の不動明王像で

あるが、それは磐石上に結跏趺坐し（帝室博物館の五鈷鈴上の不動は明瞭に結跏趺坐して居るが、他の鈴上のは半跏趺坐のものも

界曼荼羅西方（下方）の第一重、即ち中尊大日如來が忿怒教令輪の德を現するところの持明院、一名五大院、の一尊に位して居る。形相は、現圖曼荼羅に關して最も信據すべき記述と思はれる大悲胎藏普通大曼荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸説不同記卷第四に、以下の如く記述されて居る。

現圖在第一重西方西南隅、通身青黑、身相圓滿、極忿怒形、蹙眉怒目、上齒咬下唇、頂上安花六出、辮髮一束髮垂左胸前五結、右手向內垂、當腰間持劍、左手屈臂開肘仰掌、指端向左持索、面向右方、坐盤石上、火焰如迦樓羅之勢、有火焰、无量身光、^{（註五）}唯有頭光、著青珠鬘、耳著輪也、或圖無珠是は、大體に於て、既説の唐製五鈇鈴上の不動と一致して居る。

更にまた、我國に於ける不動最古像の第三種、東寺講堂及び南面不動堂の不動等、平安初期木彫の諸名作を見るに、是も亦何れも、上述の諸例と略ぼ同種類の形相を成すことが發見される。是等の木彫不動像を各々その傳來による入唐高僧の直接の製作に歸せられ得るや否や、研究を要する問題なりとするも、唐朝密教の信仰及藝術に直接に依據し靈感されて造られたことは、製作の年代も相當し、疑ひなきところと考へ得る。斯くて日本に發見せらるゝ不動の最古の遺例は、上述の三種類共に、略ぼ同様なる形相をなし、而して是等の三種類は、何れも直接間接に入唐高僧の請來或は靈感に歸せらるゝものであつたから、我が高僧等が入唐した當時の唐朝に略ぼこの形式の不動像が行はれて居た、と推定して間違なきところと思はれる。

偕て、是等の在日本の不動最古像と、吾人が茲に問題とするシカ

ゴ石彫不動像とは、一見著しく類似して居る。この類似は吾人に何を結論せしむるか。それはシカゴ像が大體の時代の見當として唐朝の製作に歸せなければならぬことを想定せしむるのである。

註一、稿本帝國美術略史、東洋美術大觀第十五卷登載の不動像である。この像の安置してある堂は同書には記述してないが、東寺沿革略史にある南面不動堂に在る祕佛不動像がそれに當ると思はれるので、今はそれに随つておく。京寶記に西院不動としてゐるのは恐らくそれであらう。

註二、高野山南院の有名なる波切不動は、高野春秋に、弘法大師歸朝に際し惠果の命により風波の難を鎮護する爲め、大師一刀三禮して刻み惠果開眼したものと傳へられ、即ち唐作といふことなるのであるが、その立像の異様なると彫刻様式上の特色とにより、寧ろ日本の藤原初期頃の製作と判定せられる。故に茲には問題外にしておく。

註三、中川千咲・長尾氏藏五鈇鈴解（美術研究・五二號登載）参照。

註四、前掲中川千咲氏の五鈇鈴に關する論文に於ては、是等の五鈇鈴上の五大明王は大師様の圖像には合致せず、寧ろ、智證請來の傳來を有しましたそう考定せらるゝ別尊雜記第三二——三四所收の五大尊像及び醍醐寺五大尊圖像と合致する理由により、「この像軌は空海以後圓珍入唐頃に彼地に流行せる」もの、従つてまた「之と同じ像様ある前記の三鈴も亦略この頃の製作と推定」されて居る。空海歸朝と圓珍歸朝との間の五十年間に、密教圖像に發達ありまた流行の變遷もあり得たことは、想像されることではあるが、五鈇鈴の如き保存によき金屬的製作にして且つ保守的な佛具には、圖像の變遷並びに流行が、直ちに敏感にその製作に反映すると考へる必要は無いであらう。余は是等の五鈇鈴の製作は、中晚唐を通じて行はれ、我が入唐高僧のいづれによつても請來され得た、と考へて、差問なからうと思ふ。

註五、佛教全書本による。然るに、「密教」所載武田豐四郎氏論文の引用文には「無身光」となつて居る。

五 鈺 鈴 (軍荼利夜叉明王)

東京帝室博物館藏

同
(降三世明王)

五
鈷
鈴
(大威德明王)

東京
帝室
博物館
藏

同

(金剛
夜叉明王)

以上は、シカゴ像に就て、圖像學より見たる大體の時代の見當であるが、更に詳しく觀察を進むれば、其所には尙ほ檢討す可き細部的問題がある。即ち、シカゴ像は、日本所在の唐朝型不動最古像と比べて、大體よく一致し、同一系統に屬することは明瞭になつたが、然し作風一段と大まかに原始的にして、その製作年代は、前記諸像に先行して初唐に遡るかと思はれ、而して圖像學上の解釋亦た必ずしも之と背馳するものでない、と信ぜらるゝのである。

今、作風技法上の問題は後に一括して述ぶるとして、先づ圖像學的觀察並びに論考を細部に及ぼすに、シカゴ像は、前記在日本の不動古像と比べて、更に一段と古様と解せらるゝ、數個の特色を保留して居る。勿論古様と言つても、この像がフィールド博物館で北魏と稱する如くそう無暗に古くなり得ないことは、それが在日本の不動最古像と類似するによりて、明瞭である。而して是等の在日本最古像の唐原本の造顯年代は、その依據の經典を搜すことによつて、その上限を定め得るわけであるが、その經典のはつきり掴めないところに困難がある。支那佛教に於ける不動の初出と言はるゝ、既説の菩提流志譯經の敘述は、あまりに簡單にして、もつと細かい儀軌に従つて造顯されたに相違ない吾人の問題とする諸像の直接の依據と見ることは出来ない。最も標準になるところの高雄子島東寺の現圖系統曼荼羅圖樣及びそれと比較材料になるところの諸曼荼羅圖樣は、何經に依據し、支那に何時出來たものであらうか。いま密敎學者の説を聽くに、胎藏界曼荼羅の我國に傳來遺存して居る異圖の主なる

ものに、胎藏圖像、胎藏舊圖樣、及び現圖胎藏曼荼羅、の三種あり、而して是等はいづれも大日經を根本としたものではあるが、胎藏圖像は善無畏系統のもの、舊圖樣及び現圖は不空若しくは西藏譯大日經の總義釋及び疏釋の作者佛陀瞿哩耶の系統のもの、而して現圖を創作したものは惠果阿闍梨であつたらう、と言はるゝ。^(註一)今、是等の諸圖樣上の不動の形相を比較するに、舊圖樣以下現圖系統の諸曼荼羅上のそれは全く同一形式に成り立つに反して、善無畏に歸せらるる胎藏圖像上の不動のみが著しく異様なるは、問題を益々紛糾せしむる。この胎藏圖像上の不動を、京都熊谷家の二卷本^(註二)によつて視ふに、茲に不動は磐石上に坐し、兩眼を開き、顔を右に向け、劔と絹索を持つ、等大體舊圖樣以下の不動と同様であるが、肩より懸ける條帛なく、口は齒牙を露さずに結び、額に水波相を缺き、且つ火焰をも背負ふて居らぬ。是れは熊谷本が寫本として、もとの圖様に省略を加へたかも知れぬ。といふ別の疑問も提起するが、また、不動の形相は、中唐の不空以後には統一され定形が出來たが、盛唐の善無畏の時代には未だそれほどに正規化されず、簡單に不規則なる造顯が許された、と見られないではない。この問題は、同じく原始的に簡單なる造顯と思はるゝシカゴ不動像と關聯して、後に再び論及するとして、上來攻究し來りたる在日本不動最古像の典據及びそれによる支那に於ける同形相の不動像の造顯は、大體大日經、そして不空の時代、といふ見當がついた。

然るに、言ふまでもなく、大日經は善無畏の譯出したるところに

して、縱令不空は不動の信仰に就いてその後種々複雑に發展させたとはいへ、その基づくところは大日經に他ならぬのであつたから、吾人の不動の研究に於ても、先づ總ての根本である大日經に於ける同尊の敘述を以て出發しなければならぬ。而してこの際不思議なるは、この大日經に於ける敘述と、これを根據となしたに相違ない前記曼荼羅上の不動像と、大體に於て一致しながらまた重要點に於て必ずしも一致しないこと、是である。大日經、即ち善無畏譯大毘盧遮那成佛神變加持經第一卷入眞言住心品第一に曰く、

眞言主之下 依涅槃底方 不動如來使 持慧刀羅索 頂髮垂左肩
一目而諦觀 威怒身猛焰 安住在盤石 面門水波相 充滿童子形

而して、この大日經を善無畏が敷衍解説したるを一行阿闍梨が筆録した大日經疏、即ち大毘盧遮那成佛經疏第五卷入漫荼羅具緣品之餘は、同一輪廓の不動の形相を、更に詳密に説いて居る。

於此下位、依涅槃底方、畫不動明王、如來使者、作童子形、右持大慧刀印、左持羅索、頂有莎髻、屈髮垂在左肩、細閉左目、以下齒嚙右邊上唇、其左邊下唇稍翻外出、額有皺文、猶如水波狀、坐於石上、其身卑而充滿肥盛、作奮怒之勢極忿之形

今この敘述を檢するに、三個の目立ちたる點に就て、前記の現圖其他の關係曼荼羅上の不動像と異なつて居る。

第一には大日經に謂ふ「一目而諦觀」、疏に謂ふ「細閉左目」、即ち不動は兩眼を見開いて居ないで、隻眼だけ開き他は細く閉ぢて居る、といふことである。是は我國の後世の不動像によつて屢々守られて、謂ゆる天地眼といふものの基を成すのである。大日經を初めとして

同系統の密教經典に、すべてこれ程明瞭に「一目而諦觀」の意味が書いてあるにも拘らず、現圖その他の曼荼羅を初めとして、直接間接唐請來に歸せられる不動古像が、殆ど總て之に違背して兩眼を大きく開いて居ることは、如何にも解し難い。それ故にこの點に關し永嚴の圖像抄以下何れも不思議がつて居る。今之を阿婆縛抄によつて見るに、同第百十六卷・不動の條に「一目開閉事」を敘して

永嚴抄云、東寺五大尊并智證大師請來不動兩目俱開、是出何文乎、私胎藏八卷次第云、開一目只表第一義諦、二目俱開爲善云々 此說本文可尋、と怪しみ、また之に續けて曰く、

或抄云、開兩目事、安鎮軌云、目口皆張文口傳云、五大尊之中尊者兩目共開云々

然しながら、この安鎮軌、即ち金剛智譯の聖無動尊安鎮家國等法は、二臂の不動も説いて居るが、主としては、安鎮法を修する時の四臂の鎮宅不動像を説き、この「目口皆張」といふも、その四臂不動の敘述に出て來るのであるから、茲に吾人が問題として居るところの、二臂不動根本像の兩眼を開いて居る典據と見るわけには行かない。吾人の考ふところでは、不動の兩眼を開くといふことは、殊更にそう言明した經文は發見し難いが、それだけまた古い不動の遺風ではなかつたであらうか。佛像は普通の場合には兩眼を見開いて居るのが當然であつて、大日經が、特に「一目而諦觀」と描出する以前の不動、例へば曩に引用した初唐の菩提流志譯經に出て來る不動の如き、眼に關して何の規定するところが無いのを見ると、兩眼は等しく開いて居たと想像されないではない。^(註三)斯くの如き兩眼の不動が

以前より存在して居たところに、大日經が譯され片眼を眇にした異様の不動が説かるゝに至つても、一方の兩眼を開いた從來の見慣れた像が或る程度まで存續し、丁度この種のものが日本に傳來する契機に遭近したのではなからうか。曼荼羅圖様の成生、尊像造顯の過程には、經說を根幹となすこと勿論であつたが、またそこに阿闍梨の口傳並びに解釋が加はり得たこと既說の如く、然らば、舊來の形像が新圖様に參加することも有り得たであらうし、また諸種の變形の加へられる餘地も有つた、と想像されるのである。

眼の開き方のほかに、なほ現圖その他の曼荼羅上の不動及びその系統のものと、大日經所說の不動と異なる點は、齒牙の現はし方に就てである。是は大日經それ自身には何の規定もないが、大日經疏には「以下齒嚙右邊上唇、其左邊下唇稍翻外出」と敘述され、後の日本に夥しき不動像が、上下の齒牙の互違ひに咬み合つて居る奇怪なる口付きをなすに至る典據をなす。然るに、現圖曼荼羅上の不動その他の口付きは、諸說不同記に「上齒咬下唇」とある通り、交互に咬み合ふ形式になつて居ない。この比較的單純なる齒牙の出し方も、現圖その他の曼荼羅上の不動が、大日經より古き質樸なる形式を守つて居る一つの證左ではなからうか。不動は五大明王の一尊として外道調伏の極惡忿怒相を現はさなければならず、それが爲めに齒牙を簡單に露はしただけが原始型であつたものを、大日經は祕密教義を高揚し象徴を複雑にして行つた爲めに、更に之に關する細かい描出の規定を設けたか、と解釋される。^(註五)

以上の如く、現圖その他の曼荼羅上の不動は、大日經所說の不動と、大體に於て一致しながら、また顯著なる細部に於て相違する形相をなし、而して、その相違は、是等曼荼羅上の不動の方がより單純なる原始性を示して、大日經の行はれた頃も、その複雑なる象徴主義以前の、より古きより簡單なる型の不動が少くとも並び行はれた、と推定せしむるのである。否、同時に唐製五銖鈴上の不動、空海圓珍等の唐摹の製作に歸せらるゝ日本不動彫像の最古例に、曼荼羅上の不動と同一なる形相を見出すことを思へば、我が密教高僧等の渡唐したる中唐晩唐の頃には、大日經は行はれながらも、實際の不動像の造顯は、尙ほ多く古様を混へ殘して居り、その種の像を或は請來し或は學習して我が高僧等は歸朝した、と推定されるのである。

——日本に見出さるゝ唐朝系不動古像の三種類を検討し、その典據を探求し、それ等を通じてその支那に於ける原型を以上の如く想定して、次に、吾人の當面の論題なるシカゴ不動像がこれと如何なる關係に立つか、を探究する順序になる。

註一 椰尾祥雲・曼荼羅の研究・頁九〇—一〇九。

註二 大正新修大藏經・圖像第二卷登載。

註三 菩提流志譯の不空罽索神變真言經は、既說の如く、大日經その他によつて作られたものと言はれる。若しそうするならば、縱令この經は大日經に先立ちて漢譯せられたにしても、そこに現はるゝ簡單なる不動に、口傳として、大日經の更に詳しく不動の儀軌が附隨して傳はらなかつた限りではなく、即ち菩提流志譯經を基として作られた不動像にして大日經による一目を眇にしたものが作られなかつた限りではない。然しながら、是も畢竟有り得た一つの場合に過ぎず、本則としては、菩提

流志の經説に従つたより單純なる造像が行はれた、と考ふ可きであらう。

註四 白寶口抄(大正新修大藏經・圖像・第七卷)に、一目を開くを釋迦不動、兩目を開くを大目不動と呼ぶ所以を説き、之に續けて、「大師繪像木像共兩目開也、又智證大師請來不動像兩目共開、大師御意等合、雖然大日經并疏等大目所變不動閉一目見但密教習不依經軌、以師承爲本、大師既繪木等共兩目開也、是非相承師傳乎」と説明して居る。是を以て見ても解る通り、弘法智證によつて請來された不動古像が何れも兩目共開にて、之が大日經の所説と合はざる點は、口傳に歸せられて居るのである。唐請來の傳來を持つ不動古像の重要作品中、唯だ有名なる高野南院の波切不動のみ、兩目共開でない。然し、既説の如く、この像は様式的に唐請來とは承認なし難く、我が藤原初期あたりの製作に歸せらるゝのであるから、茲には問題としない。

註五 既掲、胎藏圖像熊谷本に於ける不動像は、全く齒牙を露出しない普通人の閉じたる口付きをなして居るのは、如何にも不思議である。不動には忿怒尊として以外に、如來の使者としての資格も有つた故に、此のおとなしき口付をなす形像も有つたと解釋す可きであらうか。後考を待つ。

七

シカゴ不動像は、大體に於て、現圖その他の曼荼羅上の不動、及び我國に傳はる不動の古像に合致し、而して、斯る圖像が我が密教高僧入唐當時に行はれた不動像を代表す、と考へらるゝこと、既説の通りである。實にシカゴ像は、前掲唐製五鈷鈴上の不動の如く小形の工藝的製作と異り、堂々たる彫像であるから、是が從來日本側の遺品のみによつて僅かに推測し得た唐朝不動像と合致して居ることは、日本側に照應する有力なる資料が初めて支那側よりも提示されたことになつて、その美術史上の價值は甚だ高いと言はねばならぬ。而してその上に更に一步を進めて興味を唆る點は、この像

が日本の不動古像と大體一致しながら、更に一段の古様を思はせること、是である。

シカゴ不動像は、何人も一見して解る通り、すべてが質素簡樸にして原始的なる自然さを以て作られ、その構成と刻出とは、密教の象徴主義に規定されながらも、未だその象徴主義は複雑化する程度に到つてない感がある。是れこの像の製作當時に、不動が尙ほ如來の使者或は奴僕としての資格を主として、未だ忿怒尊としての象徴味が育ちかけであつた、と解し度いやうに思はれる。

先づ頭部に就ていふならば、シカゴ不動像の顔は眞直に正面を向き、現圖その他の曼荼羅上の不動、及び他の日本古像が、何れも少しく顔を右に向け、例へば東寶記が東寺講堂の傳空海作不動を敍して「面少廻向右方如視劍」といふ如きに異る。大日經及び疏には、顔面の向け方に就ては特に規定するところなく、在日本の不動古像が顔を右に向けて居ることは、曩に是等が大日經の所説と異なる點を列舉した場合に數ふ可きであつたかとも考へらるゝが、然し、同じく善無畏譯出の慈氏菩薩略修懺誦法畫像品第五に、同曼荼羅に出て來る不動を「頭稍低向右」と敍してあるのを見ると、大日經には特記してないにしても、善無畏の不動の解釋には、さういふ意味が含まれて居り、それに従つたものと思はれる。然るにシカゴ不動像は、この日本古像のすべて右向きの例と異り、顔を正しく正面に向けて居る。佛像は特別の指示なき限り正面向きに造らるゝが本則に相違なく、シカゴ像が日本古像の例と異りて正面向きをな

すは、いま一段の原始型を保留した、と解釋されないではない。

此際注意すべきは、上來吾人が屢々引合ひに出した在日本不動の最古像、唐製五銖鈴上の不動、現圖その他の曼荼羅上の不動、木彫像としては東寺講堂及び南面不動堂のそれ等、は何れも顔を右向きにして居るが、是等の最古例に續きて造られた不動像は、古像の形相を守りながらも、追々正面向きに造られ、後には全く正面向きを以て本則となすに至ることである。是れ我國に於ける不動信仰の隆盛に伴ひ、本尊としての造顯が頻りに起り、而して本尊としての不動像は、正面向きに禮拜者に對することを最も適當となすのみならず、經文及び儀軌また殆ど之を禁ずるものがなかつた爲めであらう。斯くの如き意味を持つて再び正面向きの形相を取つた最も早期の不動像としては、様式上製作年代が東寺講堂南面不動堂の不動に次ぐと思はれる高野の正智院親王院の不動、及び京都般舟院の不動等の雄作が考へられる。尤も是等の既に相當に古き不動像が正面向きの姿勢を取つて居たに就いては、或は唐より同型の不動も亦た傳へられ之に基いて造られた、とも解釋されないではないが、然し入唐高僧直接の傳來或は靈感に成つたと信ぜらるゝ前記我國の最古像が例外なく右向きになつて居るところを見ると、——正面向きの黄不動畫像の如きは個人の宗教的幻覺による特異例として別個に考へること既説の通りである——日本に最初の不動像移入の當時には、原則的に右向きの姿勢が行はれ、やがて日本では、その本尊の必要より追々正面向きに引き直して造顯された見る方が、自然であらう。

是に反して、在日本不動の最古像より更に古くなくてはならぬシカゴ像の正面向きなるは、是等の時代のおくれたる日本不動の正面向きとは、歴史的意義を異にし、空海等の入唐當時に行はれた不動よりも更に時代を遡るところの原始型を保留した、と解釋せられるのである。

而してまたシカゴ不動像も、兩眼をはつきり開いて居る。兩眼を開いた不動が、「一目而諦觀」の大日經以來の像よりも原始型に屬すと思はれることは、既に説いたところである。而して、シカゴ像には、大日經以來常に説かれて居る額上の水波相が見られない。水波相とは水波狀に平行して引かれたる前額上の皺文にて、是は現圖その他の曼荼羅上の不動及びその他の日本の古像には、いづれも明瞭に刻み込まれて居る。シカゴ像の之を缺くことも、その一段と原始型に屬する一つの證據と見られ得る。齒牙の露はし方に就て、大日經疏の所説と在日本古像の造り方と一致しないことも、既に論及したが、シカゴ像は、上顎の左右の牙とその間の齒並が下唇を簡單に咬むところの例に屬して、この現はし方が一層古いと見られる前説を裏書きして居る。またシカゴ像の顔が著しく大きく且つ肥つて見えるのは、大日經の謂ゆる充滿童子形に他ならず、不動は遙かに後世の日本の製作に至るまで、常に肥滿した童子形に造られ、それが他の一方の特色たる脅威的表情と調和しかねて、不思議に矛盾した感じを與へるのであるが、シカゴ不動像は、製作が未だ古樸稚拙であるだけに、この童子形はひたすらに無邪氣に彫出されて、愛す可き

藝術を成して居る。

頭髮の取扱に於ても、シカゴ像は一般の不動儀軌を守りながら、また著しく原始的なることが看取される。頭髮は頂上に梳き上げられてそこで束ねられ、その束ねた根元を八瓣の大きい蓮華で飾り、それから垂髪が左肩より胸前に垂れて居る、その垂髪は三個所で結束されてある。また前額の少しく上部には三個の花の髪飾りが付けられて居る。全體の結構極めて自然にして、童子が髪を結び且つ花飾りした有様を明示し、後の象徴的にあまりに作爲された無理な形と異つて居る。

不動の髪 of 取扱に就ては、大日經には單に「頂髪垂左肩」とあり、疏は少しく之を敷衍して「頂有莎髮、屈髮垂在左肩」と言つて居るが、この莎髮の意義に就ては、異説多くしてその本體を突きとめ難い。何れにしても、毛髪を或る植物に喩へて形容したものであらう。

それよりも不動の髪に就て重要な事は、そこに七髻ありといふことと、頂上に謂ゆる頂蓮が載せられて居ることである。七髻に關する記載は、善無畏の慈氏菩薩略修念誦法畫像品第五に「頂有七髻、垂一髻於左耳輪」とあり、或はまた不空譯三卷の底哩三昧耶經卷上底哩三昧耶不動明王本事神力息障必要品第一に「頂上七種髻」とある等に典據がある。日本に初めて不動像が傳へられた中晩唐の頃の同像は、七髻の象徴的意義を重要視したと思はれるが、然しこの七髻を五髻文殊などに見る如く七個の突起物となして頂上に列べることは、同じく頂上に置かれなければならぬ頂蓮との關係を難かしく

するので、別の特色である左側に垂れなければならない垂髪と關聯して、現圖その他の曼荼羅上の不動及びその種の古像は、兩者の間に種々の折衷的工夫を凝らして居る。即ち垂髪を七個所に結束して七といふ數の象徴味を保存せんとするのが最も普通に行はるゝ形にて、或はそれに加へて、頭髮を單に七分して梳き上げ、その一つが左の耳側より垂れて垂髪となるものもある。唐製五銖鈴上の不動には、垂髪に結束あることだけは判るが、それが必ずしも七結でないのは、製作が小形なる爲めであらう。シカゴ像の頭髮の取扱は、是等に比ぶれば、餘程自由であり、頭髮全體を頂上に梳き上げ束ねたものが唯だ左側に垂れて垂髪となる點も、實際的に自然である。^(註一)而して垂髪の結束は三個に過ぎない。これもシカゴ像があまりに象徴主義に煩されず、他の不動古像よりも一層の原始的なる證據と見る可きであらう。

頂蓮に就いては、經文上の典據は、不空譯攝無礙大悲心大陀羅尼經計一法中出無量義南方滿願補陀落海會五部諸尊等弘誓力方位及威儀形色執持三摩耶幪幟曼荼羅儀軌に「東南無動尊、髻上八蓮葉」とあるのみだそうであるが、口傳として、頂蓮のことは熟知せられ、或はまた唐朝の阿闍梨が「裝飾として不動尊の頂上に金縷で蓮華を結び着けたのが頂蓮の起源」といふ説もあるとのことである。^(註二)その起源説の適否はいづれにせよ、唐朝にこの種の風習のあつたことは、シカゴ像に於ける頂蓮の實際に髪飾らしき彫出によつて、或る推察が出来る。それは、八瓣の大きい花を頂上に束ねた髪 of 根もとに細

紐で結び付けたもので、髪飾りとして大きい一つの花を頂上に付けたとしたならば、斯くしたのが、最も自然と言ふ可きであらう。然るに日本に在る現圖その他の曼荼羅上の不動及びその他の古像に於ては、丸い不動の頭頂に、坐りの悪い蓮華花が一個の置物の如く載せられてあつて、その不自然さは、單に儀軌の必要によりて添加されたものに過ぎざるかの感を與へて居る。この頭上の置物の如き不自然感は、特に我が木彫不動像に於て甚だしく、之を見ては、日本の密敎家が頂蓮を以て行者を涅槃の覺臺に運載するといふ不動尊の奴僕三昧を表示したと解釋したり、或はまた之を大聖不動尊秘密陀羅尼經にある「欲見諸佛土、明王忽出現、頂戴於行者、能令得見之」の文に附會した、行き過ぎたる象徵主義の適用も會得される。是等と比べて、シカゴ像は、童子の頭髮を單に花で飾つただけの原始型を保存して、最も自然であると思はれる。

シカゴ不動像の體軀に就ては、特記す可き何物もない。上半身裸體にして瓔珞環釧等の莊嚴を纏ひ、左肩よりは條帛を懸け、腰衣を着けて半跏趺坐すること、すべて正規の造像に従つて居る。右手に劔を執り、左手は肘の關節より折れて失はれて居るが、それが怖らく絹索を捧げ持つたであらうことは、他の古像と比較して、疑を容れない。——以上を綜合してシカゴ像の形相を勘ふるに、それぞれの特色は極めて實際的に單純に造られて居て、是ならば、終には不自然な象徴的形體を取る以前の自然よりの出發、と見ることが出来る。斯くの如き自然的存在より象徴的存在への密敎的進化は、不動

の性質として、如來の使者或は奴僕としての資格より忿怒尊に進む過程に平行するのであるが、シカゴ不動像は、童形の使者としての特色を、現存像中最も多く保留するものと見なければならぬ。

シカゴ像に附屬して更に問題になるものは、蓮華座である。大日經以來、不動の安住する座は原則的に「盤石」であり、更に之は諸經に於て、或は「寶石」「寶盤山」「金盤石」「金山」「金剛石」「五寶磐石」「磐石七寶金山」「瑟瑟寶」等と形容せられ、日本の儀軌圖像集等には、好むで「瑟瑟座」とか「瑟瑟寶盤石」とか呼ばれて居る。而して瑟瑟とは、或は「壘石貌」「斑石」「大海珠之勝者」等の意味す。斯くの如き寶石的形容は何れにせよ、そのうち必要なるは盤石であつて、磐石座上に寂然と安住することが、即ち無動不動の義となる。斯くの如き意味は大日經疏以來常に説かれたところであつて、現存の二臂の不動根本像は、殆ど例外なく、磐石座に坐するに至るのである。然るに、他方、不空譯の三卷及一卷の底哩三昧耶經は、何れも蓮華座上の不動を敍し、之をもとにして覺禪抄にも劔索を持つ不動、杵と索とを持つ不動、何れもが蓮華座に乗るところの圖像を掲げて居る。シカゴ像は彫刻樣式より現て、不空の譯經のあらはれた中唐よりは遙かに古く判定されること、既に多少説くところあり、後來また詳論する通りである故に、底哩三昧耶經の敍述を以てシカゴ像の蓮華座の典據と見る譯には行かない。然しながら斯る説の出得たるは、それ以前より素地があつたものと解釋されないではない。即ち縱令經文に不動の蓮華座を明記されたのは、不

空の底哩三昧耶經に初見すと雖も、元來曼荼羅上の諸尊は、特別の規定なき限り蓮華上に坐するのが原則であつたから、磐石座を明記して不動の造顯儀軌の確定する以前の不動は、蓮華座に住したかも知れぬ。若しも斯くの如き解釋が可能ならば、蓮華座は不空の譯經以來典據を以ても造られ得たと同時に、またそれ以前の不動も同種の臺座上に坐つたとも見られ得ることになる。

然しながら、茲にまた一つ別個の解釋の成り立つことも、承知して置かねばならぬ。即ちシカゴ像は現在蓮華座を有するのみであるが、その底部は置物の如く作られてある。従つて、或はこの不動像は蓮華座のまゝ別の磐石座上に載せられてあつたかも知れないのである。この際記憶さるゝことは、東寺講堂の傳空海作不動像が、磐石座に坐すと同時に、そこに蓮華座をも併せ設けられて居たことである。東寶記第一卷には

不動〔中方〕周丈六

坐瑟々座（九重相累ト右脇ニ註ス）、座下有八角大座、座上周匝瑟々座邊有
大白蓮華〔平伏彫付之〕、結跏趺坐云々

とある。尤もこの大白蓮華をつけたといふのは八角大座の座上にし
て、即ち瑟々座の下に今日普通に言ふところの八角框座を設けられ
蓮華はその周圍につけられたものであるから、東寶記の製作年代が
南北朝なるをも併せ考へ、同不動本來の座ではなく後來添加された
ものと見る可きかも知れない。従つてこの例は吾人の問題に多少の
興味ある類似を示すに過ぎずして、参考にはあまりならない。

最後に問題になるのは、シカゴ不動像の光背とも考ふ可き部分の、
正面側面何れより見るも略ぼ三角形を成す點である。不動は大日經
に謂ゆる「威怒身猛焰」にして、常に火焰を背負つて居らねばなら
ず、^(註五)その爲めに、シカゴ像は、不動像それ自身を彫刻した背後に、
火焰を光背様に刻出、或は彩色を以て描出する餘地を残す必要があ
り、その結果、尊像を浮彫にした背面に石塊が残されたに相違ない
のであるが、然しそれにしても、支那佛像彫刻の普通の光背に比較
すれば、この不動像のその部分は餘りに底部厚く頂上尖りて、全體
の圓錐形的構成著しく、従つて其所に、何れの方より見るも、不
動が一個の三角形のうちに在るかのやうに作られた、と考ふ可き理
由がある。而して茲に聯想さるゝのは、三角形内に位する不動を説
いた儀軌の存在である。即ち大日經疏第九卷息障品第三に

復更明異方便、以方便力除一切障也、即是前所說不動明王、此不動明王本

漫荼羅即是三角漫荼羅、其中黑色是也

とあるを初めとして、同じく善無畏譯・尊勝佛頂修瑜伽法儀軌、同
譯・慈氏菩薩略修愈識念誦法にそれぞれ説かるゝところの畫像は、
三角形中に不動尊を描出することを説き、^(註六)現存尊勝曼荼羅また斯く
の如き不動を顯はして居る。密教の象徴として三角形は火を意味し、
それ故に火天は三角形を手に持つて居る。而して大日經義釋即ち大
日經疏の異本には「三角是降伏除魔障義」と解釋せられ、『この三角
形は「赤中之赤火中之火焼中之焼」と稱せられる囉字の智火光を表
はした除障曼荼羅であつて、よく内外の諸障煩惱業苦を焼滅する功

徳があるから、諸の降魔會の所居となす』^(註七)といふのである。シカゴ

不動像が全體として三角形をなすかの如く見ゆるも、亦た斯くの如き降魔尊の所居を意味するのではなからうか。而して斯く不動を三角形中に描出する場合には、不動の色は黒色たる可きやう規定されて居るが、シカゴ不動像が黒大理石を以て刻出されて居ることは、この想像説を裏書きするかの如く思はれる。但し、シカゴ不動像は斯くの如き彫像の現存唯一の遺例にして、吾人の知れる限り、他に全く彫刻としての比較材料を有たないのであるから、吾人の想像説も單に一つの解釋の可能性を提出するに過ぎない。

註一 胎藏舊圖樣(武藤金太氏藏本、大正新修大藏經圖像第三卷)の不動像は、垂髮を頂上に束ねたる髮より出發せしめて居る點で、シカゴ像に似て居る。

註二 武田豐四郎・不動明王論(密教、第五卷・第一號)

註三 同前

註四 この經末詳。大正新修大藏經にも、佛書解說大辭典にも見當らず。前出武田豐四郎氏論文中の引用文による。

註五 胎藏圖像(熊谷本)に於ける不動が、火焰を背負ふて居らぬことは不思議である。この像の他の甚だ不規則なる特色と共に、是も亦寫本が原本を傳ふるに省略を加へたものなりやを疑はせる。この問題に就ても、後考を待たねばならぬ。

註六 大村西崖、密教發達史・卷三・第二七圖、第二八圖。

註七 武田豐四郎、不動明王論(密教・第四卷・第四號)

八

以上の圖像學的各論を綜合して、シカゴ不動像の史的位置を定むるに、同像の形相は多くその經典上の依據を、盛唐善無畏の譯經に

見出した。或は中唐の不空の譯經中に典據の初出を見出す部分もあったが、それ等も全然新機軸といふものではなく、寧ろ舊來存在して居た細部の新たな組合せといふ可きものであつたから、一方に、密教に於ける口傳の尊重、從つてまた經典上に明瞭なる依據なき造像の發展化成の可能性を考慮に入れる時、それ等の造顯が、不空の時代より古く遡つて行はれたことを可能ならしむる。夫故に、シカゴ不動像を、主として圖像學の立場より時代を判定するならば、その典據の大多數を見出すところの善無畏譯經の時代を上限となす、と一應の結論をなす可きものと思はれる。

然しながら、一方に彫像製作の様式的批判があつて、之を圖像學的判定と照應せしめなければ、正當なる結論に達し難い。何となれば、譯經の年代を根據とする圖像學上の判定は、一見甚だ嚴密に見えて、實は常に必ずしも然らざること、上來既に折にふれて多少論じた通りである。譯經は實に新教理の支那に入つた年代を明記する最も信頼す可き標識に相違ないけれども、その用語、解釋、それを敷衍説明し、それを基として畫像儀軌を編纂し曼荼羅に組織して行く過程には、舊來存在したる思想習慣、從つてまた舊來存在したる類似の造像を、攝取する機會も有り得たと同時に、未だ漢譯されぬ佛典や造像の儀軌等の知識が西域より早く傳はり口傳になつて流布して居たことも、西域僧の渡來者多く而して是等の西域僧が主として譯經に従事した事情に鑑み、決して不可能ではなかつた。それ故に、或る特殊佛の出現は或る特定の譯經以前にあまり多く遡り得ず、

即ち典據たる譯經の年代は佛體製作の時代づけの大體の附け石になる原則は動かす可からざるにしても、その佛體の形相表情持物等の細部の描出に關しては、その一々の經文的根據の出現の順序に時代的配列をなさねばならぬ程、窮屈に考へることは出来ない。されば、或る佛像の時代の判定をなすに、その一々の特色を圖像學的に分析し、出典の順序を探索することは、勿論肝要であるけれども、同時に、逆に、その佛像の存在それ自身が亦た圖像學の史料に他ならず、その様式批判による時代判定は、翻つて圖像學史の輪廓付けに寄與貢獻しなければならぬのである。

斯くて、今、シカゴ不動像を彫刻様式的に檢するに、先づ比較材料に擧げらるゝものは、既掲の唐製五鈷鈴である。是等の五鈷鈴は、見るからに、繁縷なる技法に成り、その動搖的な裝飾と彫刻との混淆は、文化の頽廢期に近づきたることを示し、之を晩唐に限るの必要なきは既に論及した通りであるが、中唐をあまり遡る筈のものではあり得ない。之等と比べてシカゴ像は、その材料及び目的上の相違を考慮に置いても、尙ほ且つ相當に時代の間隔を豫想せしむるものがある。然らば、中晩唐より何處まで遡りて、シカゴ像の時代づけをなし得るのであらうか。之を盛唐と見得るならば、善無畏の時代に當り、前記圖像學上の一應の結論に適合して、最も都合がよいのであるが、余の判定は寧ろ之を更に一時代遡りて、初唐様式と考へるに傾く。

支那美術史の廣大なる、能く藝術様式が時代的に統一され、支那

美術全體が時代の經過と共に組織的に進展し得た、と解す可きであらうか。是は地域も狭少に文化も中央集權を以つて大體一元的に發育して來た我が日本の如き國とは、餘程事情を異にしたに相違ない。即ち支那の如き國柄に在りては、様式の時代相は地方別に先後混淆し複雑化されて、現今美術史界を風靡する一聯の様式發展史は、部分的以外には、容易に適用されそうもない。斯くの如き支那の特殊事情からは、初唐の様式が盛唐まで殘留しなかつたと斷定することは却つて不自然になるのであるが、シカゴ不動像の場合は、それより更に進んで、その原始性はあまりに顯著にして、藝術爛熟し豐潤妍麗を極めたる盛唐に之を配することは、如何しても無理と思はれる。

最も信賴し得る盛唐石彫の標準作は何であらうか。吾人に最も手近なる著例としては、早崎氏によつて將來せられ、その大部分が細川侯爵家の收藏に歸したところの西安府寶慶寺の石彫佛像群より優れたものは見出し得ない。^(註一)この石彫群の幾體は武周の長安より玄宗の開元に互る年記銘を有し、且つ又年記なきものをも通じて作風に統一ありて、大體初唐より盛唐にかけての製作を揃へたる一大群像をなす。即ち是は當代の彫刻様式を時代と共に判定する上に絶好なるものと言ふ可きである。しかも、其上に是等の寶慶寺彫刻群が、吾人の論題なるシカゴ不動像の比較材料として、特に適當なる所以を記憶しなければならぬ。シカゴ像も西安附近に出土して、同じく西安に製作された寶慶寺群像の或るものと、石質も相近く、また製

作も唐朝文化の中心地西安の同一系統に屬し、兩者の比較は、地方別の問題にあまりに引かゝらずに、直ちに時代の先後の問題になる。

偕て、この寶慶寺石彫群の傍にシカゴ不動像を置きて考ふるに、後者は如何に原始的に見らるゝであらうか。寶慶寺石彫群中にも、詳しく檢すれば作風に先後あること、その年記より考へてもとより當然であるが、先づその開元作風のものと比較して、シカゴ像は遙かに古式に見られる。而してまた、その群中古きものと比較しては、作風は可成りに異なるが、しかし細部の刻出に類似したる技法の或ものを認め得ないではない。但し全體として見れば、寶慶寺石彫群は刀法鋭く且つ鄭重にして彫琢の妙を極め、シカゴ像はその傍に於て甚だしく古樸稚拙に感ぜられるのは、前者が首都の大寺の爲めに造顯せられたる當代の精藝であるに對して、シカゴ像は郊外の名もなき一製作に過ぎなかつた爲めであらう。即ちシカゴ像の史的位置に就ては、同像所藏のシカゴフィールド博物館が之を北魏にまで配したことは、その顯著なる原始性にあまりに迷はされたる結果と解す可く、是は寶慶寺群像の古きものより更に多少古く、年代は初唐、そして技法あまりに本格的ならざる製作、と考へるのが穩當であらう。

而して斯くの如き初唐への様式的時代付けが、圖像學上の推定にも全然矛盾すと考へる必要なき所以を、この際再び回顧して置き度い。漢譯佛典に於ける不動の初出は、菩提流志の景龍三年譯出不空羼索神變真言經に在りと言はるゝが、この手間のかゝる譯經の完成

に先立つ幾年かには、不動に關する知識と信仰とは周圍に流布されて居ない限りではなく、また一方、縱令姚秦の鳩摩羅什の金剛吼菩薩にまで遡らずとするも、菩提流志以前に六朝末初唐を通じて西域より支那に流入しつゝあつた種々なる密教的知識のうちに、既に不動が紛れ入らなかつたと斷言するわけにも行かない。而して是等により徐々と準備せられて、遂に盛唐の善無畏の時代に到りて、不動の詳しい儀軌は成立するのであつたが、尙ほその時代に於てすら、造像に古様を残し得たことは、胎像圖像に見られる簡單なる不動像によりても推測せられた。シカゴ不動像に在りては、その未だ自然を乖離しない原始性は、或る意味に於てもつと顯著なりとなす可く、然らば、不動像發達の途上に、善無畏より更に遡りたる初唐の口傳か或は失はれたる典據による一相を表はしたものと、と解釋なし得るかに考へられる。即ち余はシカゴ像を略ぼ寶慶寺佛像群に先行する初唐、西紀にして第七世紀の恐らく後半に配す可しとなして、この珍らしき一資料を提出する次第である。

註一 大村西崖支那美術史彫塑篇・圖版第八〇一—八・本文第五九三頁。關野貞・常盤大定・支那佛教史蹟・第一・圖版第二四—九、同評解一・第四二—五〇頁。
谷信一・寶慶寺石佛に就て（國華・第四九九・五〇—一號）